

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

一部の私立学校を除いて日本の小学校における英語教育の歴史は浅く、すべての公立小学校において5年生と6年生に1時間ずつの「外国語活動」の時間が設定されたのは2011年度からである。また、外国語活動は正式な教科ではないため、その目標設定、指導内容、指導方法には自治体、学校、教員によって大きな差異がある上、英語や英語指導の専門知識を持たない教員が大多数であるため、指導の質保証という点で大きな問題を抱えている。2020年度からは小学校に正式な教科として外国語(英語)が導入されることが予定されており、英語教育研究においても小学校における英語教育、小学校児童の英語学習についての知見を得ることが喫緊の課題となっている。小学校児童の英語学習への動機づけの研究においては、特に年齢(学年)による差異に焦点を当てた研究は行われてこなかった。カレイラ松崎順子氏の博士論文においては、中学年と高学年における違いに注目し、児童が内発的にどのように異なって英語学習に動機づけられているかを明らかにした点、日本の小学校児童の英語学習への動機づけ志向を「自己決定理論」の視点から調査し分析した点に意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は、Study 1, Study 2, Study 3 の3段階に順序立てられており、Study 1において予備調査を行い、Study 2において本調査、そしてStudy 3において自由記述回答の分析を行っている。Study 1では、「教師の自律的支援に対する児童の認識」「心理的三欲求」「英語学習に対する動機づけ志向」について3つの仮説を設定し、505名の生徒を対象とする予備調査を行い、Study 2の本調査で使用する質問紙作成のための情報を得た。Study 2ではStudy 1の結果に基づいた仮説とモデルの設定ならびにその検証を271名の児童を対象に行い、そこから英語教育への具体的示唆を導き出した。Study 3では自由記述回答から児童の動機づけ志向を解析している。これらの手続きは、英語教育の動機づけ研究の手順として妥当なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

Study 1においては関連先行研究をもとに、①「教師の自律的支援に対する児童の認識」、②「心理的三欲求(有能性の欲求、自律性の欲求、関係性の欲求)」、③「英語学習に対する動機づけ志向(内発的動機づけ、同一化調整、取り入れ的調整、外的調整)の各構成概念の関係について、3つの仮説を設定し、因子分析によって構成概念を特定し、その結果を踏まえてStudy 2におけるモデル設定ならびに質問紙作成を行っている。対象は505名の小学生児童である。Study 2においては、271名の児童を対象に、①、②、そして③のうちの内発的動機づけの関係を調査し、パス解析によってモデルの検証を行っている。また、Study 3においてはテキストマイニングツールを活用して記述回答の分析を行っている。理論的枠組みを踏まえて研究資料を作成し、それを予備調査で検証・修正した適切な研究資料を本調査で用いており、そこで得られたデータの分析方法も適切なものである。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究によって得られた結果に対しては、理論的基盤および本研究における仮説およびリサーチ・クエスチョンに対応した適切な考察がなされており、そこから得られた結論も妥当なものである。また、本博士論文における研究は、論文として国際誌 (*System*) に 2 本と国内学会誌 (外国語教育メディア学会機関誌) に 1 本掲載されており、また、本博士論文において、言語教育では最も権威のある国際誌の一つである *Language Learning* の Language Learning Dissertation Grant Program の助成を受けて研究を行っていることは、本研究の学術的水準が国内外の学会で高く評価されていることの証左と言える。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

カレイラ氏は、小学生の英語学習に対する動機づけに関する一連の研究を行い、特に児童を研究対象にする際には児童の発達に注目しなければならないという観点から、一貫して彼らの発達の傾向に焦点をあてた研究を行ってきた。修士論文では、小学 3 年生と小学 6 年生の英語学習に対する動機づけの違いを明らかにし (全国語学教育学会の *JALT Journal* 31 に掲載)、博士後期課程報告論文では一般的学習に対する内発的動機づけと英語学習に対する動機づけの関係とそれらの発達の傾向を明らかにした (前掲 *System* 39 に掲載)。Palgrave Macmillan から出版された書籍 *Innovating EFL Education in Asia* と日本児童英語教育学会の研究紀要 *JASTEC Journal* 25 にも関連した論文を掲載しており、本博士論文はそれらの研究をさらに進めたものである。日本において児童の英語学習に対する動機づけの研究は比較的新しい研究分野であり、カレイラ氏の一連の研究はこの分野の発展に大きく寄与するものである。以上のことから、本博士論文は、本研究科の趣旨に合致するものであり、博士 (教育学) の学位を授与するに値する内容を備えたものであることが認められる。